

公表用

助成対象事業成果報告書(概要版)

制度名	情報バリアフリー役務提供事業推進助成金
助成対象事業名	視覚障害者向けのインターホン機能を持つスマートフォンアプリの提供
助成対象事業者名	ヤマハ株式会社
助成金の額	18,000 千円

【助成対象事業の全般について】

①	助成対象事業の概要	駅や空港、商業施設等を中心にインターホンの設置が進む一方で、視覚障害者は、インターホンの設置場所がわからない、使い方がわからないといった課題があり、利用が困難な状況にある。主に聴覚障害者や外国人に向けたスマートフォンで使えるインターホンサービスは既に提供されており、こうしたサービスに、音響通信を用いたアプリで自動接続できる視覚障害者向けの機能を追加することで、障害者がインターホンに容易にアクセスでき、利用しやすい環境を提供する。
②	助成対象事業の目標	課題① インターホンは様々な場所にあるが、視覚障害者は設置されている場所が分からない。 ・視覚障害者が利用するためには誘導が必要。 課題② インターホン毎にボタンの位置や使い方が異なり、利用できない。 ・メーカーがそれぞれ独自に開発している。 ・視覚障害者が利用するためにはサポートが必要。 当社のサービス提供によりこれら①②の課題を解決する。

【令和7年度実施部分について】

③	助成対象事業の実施内容	(1)調査・課題整理 視覚障がい当事者へのヒアリング、施設管理者へのアンケート調査、筑波技術大学との意見交換を通じ、以下の実態を把握した。 ・視覚障がい者は施設利用時に事前確認・事前予約を行う傾向が強い ・無人化施設では、支援を求める行為自体が心理的・物理的負担となっている
---	-------------	--

		・物理的なインターホンの位置把握が利用の大きな障壁となっている (2) サービス設計・開発 上記結果を踏まえ、以下を前提としたサービス仕様を設計・開発した。 ・視覚情報に依存しない操作設計 ・スマートフォンによるアクセス ・音声による案内・操作 主な機能として、音声読み上げ機能、係員への通話機能、物理インターホンを探す必要のない利用方式を実装した。 (3) 実証実験および改良 視覚障がい者を対象とした実証実験を 2 回実施した。 実際の駅で実施した第一次実証では、全盲・弱視・高齢者など視覚障がいの多様な特性が確認され、幅広いユーザーを考慮した設計の必要性が明らかとなった。 その結果を受け、UI 改善、GPS 機能やカメラ機能の追加等の改修を行い、第二次実証実験を通じて改良内容の検証を実施した。 (4) 市場検証 開発したサービスについて展示会に出展し、自治体、医療機関、教育機関、商業施設関係者など幅広い分野の関係者を対象にヒアリングを行った。
④	助成対象事業の成果	視覚障がい当事者の意見を反映した、スマートフォン型インターホンサービスの基本構成を確立した。 二回にわたる実証実験には 19 名の当事者が参加し、場所の把握・操作性の両面において 7 割以上から好評を得た。個別の評価項目では、 ・「物理インターホンを探さなくてよい」 84% ・「自力で係員と連絡が取れる」 68% という結果となり、設置場所がわからない(課題①)、使い方がわからない(課題②)の双方に対する有効性が確認された。 一方で操作手順が多いという意見から UIUX の簡素化が必要であることがわかった。

		また、当システムを展示会へ出展し、鉄道駅に限らず、医療機関、商業施設、教育施設等 30 名以上から好評を得た。 以上の活動により、商用化・事業自立化に向けた改善事項や課題が明確化された。
⑤	補足説明事項	本事業により、視覚障がい者が施設を安心して利用するための新たなコミュニケーション手段の有効性が確認された。 今後は、実証結果を踏まえた機能改善と利用エリアの拡大を進め、情報バリアフリー社会の実現に資するサービスとして社会実装を目指す。